「松浦武四郎ってすごいね」

５月14日に行われた「奥春別・美留和・和琴小学校集合学習」での１コマ。絵本「北加伊道 松浦武四郎のエゾ地探検」の作者、関谷 敏隆さんの講演が行われました。講演後には児童たちと握手を交わし、交流していました。

Public relations magazine

てしかが

2018.6 No.766

主な内容

- 新たな地域おこし協力隊員が着任！‥❷
- 協力隊通信‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥❸
- 第43回児童生徒読書感想文コンクール‥❹
- 児童手当を受給している方‥‥‥‥‥❽
- 介護保険の保険料が決定しました‥‥⓱
- 町税などの納期限／夜間納税窓口開設‥㉖

むかしむか史（332）

てしかが歴史写真館 206

他の地域との違いを特筆した一場面

図3　ヲヘライベ・シユリヲホの図

魚類資源豊富な湖として

―松浦武四郎メモリアルイヤー ―

屈斜路湖の和琴半島自然探勝路沿いに、松浦武四郎さんが出版した「久摺日誌」の記述を紹介する看板が２つ立っているのをご存じでしょうか。そのうちの１つが、魚の種類を絵入りで解説したものです。

「ヲヘライベ」とは、現在も「オビラメ」という名を残すイトウの一種とされ、「シユリヲホ」「ヲツトイ」はワカサギやウグイなど解釈が複数存在し、「カハルチエップ」はヒメマスを指していると言われます。これらの魚は、屈斜路湖を訪れる前に立ち寄った阿寒湖畔ですでに収録していますが、「屈斜路と阿寒の両湖だけにいて、ほかでは一尾も見たことがない」と書き添えています。

武四郎さんは、屈斜路での聞き取り調査で、前年の秋に鮭が不漁だったことにも触れています。サケの存在は、アイヌの人たちが最も格の高いカムイ(神)として崇めたシマフクロウの存在も想像させます。世界中に生息するフクロウの中で唯一、魚類を主食とするシマフクロウは特にサケやマスが大好物。アイヌの人たちもサケを主食としていましたから、生活圏が重なるのです。大正から昭和の時代を生き抜いた古老たちも、「コタンは魚がなんぼでも取れた」「和琴でも秋味(サケ)の山ができていた」(屈斜路80年誌より)と証言しています。

今年87歳になるフチ(おばあさん)も教えてくれました。「湖水ぶちにチプ(丸木舟)がずらっと並んでいてね。ウグイぐらいじゃ見向きもしない。そりゃそうだよね、屈斜路湖にはおいしい魚がほかにいくらでもいたんだから。ありがたいことだよね」。

てしかが郷土研究会(斎藤)

てしかが 2018.6

毎月１回発行　発行／弟子屈町　編集／まちづくり政策課　☎４８２－２９１３　FAX４８２－２６９６
〒０８８－３２９２ 弟子屈町中央２丁目３番１号　URL http://www.town.teshikaga.hokkaido.jp/

この広報紙には再生紙を使っています